



講師 宮本 寛 氏

12月9日、香川県立中央病院から宮本 寛氏を招き、新米パパママ講座を開催しました。育児休暇（以下「育休」という）を取得された1児のパパである宮本さんからは「取得した動機」、「取得できた経緯」、「育休後」など、男性の育休についてお話を伺いました。

なぜ育児休暇取得を考えたのか？

宮本さんの育休取得の動機は本や映画からの影響、自身の人生観など、複数ありました。映画“きみに読む物語”の冒頭の台詞を聞いたとき、**命懸けで子どもや家族を大事にしたと人生の最後に思いたい**と思わされたそうです。自身の人生観からはたくさんの思いを伺いました。「何で自分の子どもなのに育児より仕事が優先なの？」、「子どもに自分と同じ思いをさせたくなかった」、「家族>>>仕事と考えられる父・夫になりたい」、「自分や家族の人生を『よかった』と思えるものにしたい」、「最期に幸福かどうかを左右するのは、どれだけ家族と良好な関係を築けていたか」、「最期の瞬間に握ってくれるのも、握っていたいのも“家族の手”」、「新生児期は短く一度しかない、そのかけがえのない瞬間を大切にしたいかった」、「妻一人ではちょっぴり不安。育児が大変なことは分かり切っているんだから、せっかくだから大変さを二人で楽しもう」、「自分が先陣を切らなきゃ世の中変わらない！」

なぜ育児休暇を取得できたのか？

宮本さんが育休を取得できた背景には「恵まれた環境」と「創り上げた環境」+αがありました。公務員、大規模病院勤めという恵まれた環境でしたが、それでも取得に向けて要した時間は3年。3年がかりで患者さんにとっても経営にとってもメリットを生み出せるシステムを構築したり、保護者（患者さん）や職場に子どもの発達の専門家という視点で丁寧に説明して理解を得たり、同僚の育児に協力したり、入庁時から呪文のように育休取得宣言をしたりと取得に向けて様々な取組をしていました。その経験から男性が育休を取得するには**長期での計画力、コミュニケーション能力、発想の転換・想像力、他者への思いやり気づき、したたかさ、計算高さ**が必要になると話されていました。

育児休暇を取得してみて

宮本さんが育休中にしていたことは「授乳以外」の全て。新生児期の赤ちゃんのことは「何もわからない」ことが「わかった」ことで、たくさん関わり、たくさん悩み、たくさん相談し、たくさん調べました。そのおかげでたくさん知ることができたそうです。何より二人で相談したり、調べたりする時間がたくさんできました。そして、一括りで「育児サポート」ではなく、3つの側面からバランスの取れたサポート、重いものをもってあげたりする「パートナーの身体的なサポート」、ありがとうなどの言葉をかける「パートナーの心理的なサポート」、同じ絵本を読んでも、同じようにだっこしても、赤ちゃんには母親と父親から別の刺激となる「赤

ちゃんの成長・発達を促すサポート」が大切と感じました。

育休中には育児・家事の大変さを痛感。何もわからない状態で常に不安で心細く、でも逃げ出すこともできず、睡眠もろくにとれず、体力が未回復の状態家事もこなし、たった1回泣き止ませるのも大変なこともある。もし、男性が「この経験」をしたなら女性に対して、育児・家事に対しての見方が変わると話されました。子どもはママの身体の中で育て、ママから産まれる、この時点で既に親としての意識や責任感に違いが生じ、ママだけが育児をすることでそれらに加え、子どもについての知識や情報、さらには親子間の愛着関係等にも格差が生じる。ママの方がよくわかっている、ママの方によく懐く、そうするとやっぱり任せてしまう、これを「育児転嫁への負のスパイラル」と呼んでいました。育休を取得することで、スタート時点からライブで常に同時に情報を共有できたことで「自信を持って」、「能動的に」育児ができ、そうすることで子どももパパ・ママ同じように懐くようになり、より愛おしく可愛いと思えたそうです。

育児・家事をすることで同じスキルの「しゅふ」が二人になり、皮が剥きかけのニンジンがあっても、洗いが途中で、掃除機が廊下にあっても、洗濯物が畳み掛けでも、おむつが床にころけてても、そうなった状況が推測でき、穏やかな気持ちのまま、それまで何をしていたか、これから何をやるつもりだったのかがお互いわかるようになり、その後、役割交代しても同じ“結果”にたどりつけるようになりました。さらにママの些細な不安、悩みに「共感」ができるようになったことも育休の大きな成果と言えそうです。

育児休暇取得後、現在

現在も休暇を利用して検診や、誕生日、ひな祭り、クリスマス、お祝いごとなどを行ったりしています。平日は出勤前まで関わるようにし、夜は少なくとも「お風呂」と「寝かしつけ」はしているそうです。睡眠は脳の発達、情緒面の発達、記憶の定着にとっても大事なことで夜遅く起こすなど、大人の時間に合わせないことが大事と強調されました。また、月2回、朝から夕方まで二人だけでお出かけする日「パパデー」を設け、妻だけの時間を確保しながら、父親との愛着関係を深める育児のブラッシュアップをされていました。

講演後、参加者からたくさんの質問があり、自分が良かれと思ったこともパートナーはそう思わないことがあるのでその時々、パートナーのニーズを聞きながらやること、出産・育児は定義しないことが大事との回答に、宮本さんの魅力にまた1つ気づくことができました。

育休を取得したパイオニア的存在である宮本さんからは、育児に関わった喜びや楽しさ、さらには発想の転換があったことなどが伺え、育休を取得したことによるマイナスの意識はほとんど感じられず、参加者の多くは男性の育児を肯定的に捉える機会になったようです。

